

秋田市太平の黒沢地区で水稲と野菜類を手掛ける渡邊兵太郎さん。黒沢生産組合の代表として手掛ける品目は、枝豆約80アールやキャベツ約40アール、ネギ約20アールなど多岐にわたる。多品目の栽培に汗を流しながら品質の向上にも努め、秋田県種苗交換会などでも入賞の常連だ。

はじめてのキャベツが入賞

以前は水稲のみだった渡邊さんの転機は、63歳のとき。ドックで発見した病気の闘病生活にひと段落つき、他の品目にも挑戦しようと考えていた頃、JAの営農指導員にキャベツ栽培の話を持ちかけられた。営農指導員に栽培方法を伺いながら収穫までたどり着いたところ、出来は上々。秋田県種苗交換会に出品すると、栽培1年目でありながらも1等賞に輝いた。その後も営農指導員から話を聞きながら、枝豆なども始めた。

「わからないことがあるときは、営農指導員に尋ねて教えてもらいます。水稲苗をハウスに並べるときや野菜の出荷作業などは、知人の力を借りて行っています。皆に助けられていますね」と話す。

連作障害の対策に繋がる多品目栽培

雪どけとともに農作業が始まり、複数

品目の作業に次々と取りかかる。

4月中旬に水稲の種まきを終え、「神風香」など早生品種の枝豆の播種作業にあたる。5月はネギの定植と田植え作業。「神風香」は7月20、21日の土崎港祭りに合わせて出荷できるよう栽培する。「味風香」を経て「湯あがり娘」の収穫をお盆頃までに終えると、キャベツの移植作業に入り、ブロッコリーなどの品目の作業も続く。稲刈りが終わると、ネギの収穫へ。キャベツの収穫は10月下旬頃から始まる。

「昨年はネギの収穫が、雪が降る直前までかかり大変でした」と振り返る渡邊さん。その年の天候などを見極めながら様々な作業を進めなければならぬが、一方で、異なる品目を栽培することは連作障害の抑制にも繋がられる。

体を使う農業を続けるには、健康が第一。冬になり農作業が比較的落ち着いてくると、病院で健診や検査を受ける。「冬は体のケアをする期間です」という。

堆肥などで品質維持

もちろん、忙しいなかでも品質に妥協はできない。土壌が粘土質の同地区周辺は、稲作の適地。一方で、枝豆やネギなどの畑作の場合は、暗渠などで排水対策に細心の注意を払う。

堆肥は10アール当たり1・2トン施用。枝

豆では病害虫防除とともに液肥の葉面散布も欠かさない。「堆肥を使うことで農作物に甘みが出て、野菜を食べた人に喜ばれています」と語る。

今年も、忙しくも充実した季節がやってくる。「消費者に美味しい野菜を届けられるように、毎年勉強しながら、これからは頑張っていきたいと思います」と渡邊さんは笑顔を見せた。



秋田地区営農センター
三浦 雄輝 係長



渡邊さんは多品目の作業に追われながらも、堆肥や生育促進として葉面散布などを行うことで、安定的な収穫に結びついています。手間はかかりますが、この手間が圃場の地力や作物の成長力を向上させ、収量の増加や品質の改善が見込めます。おいしい野菜を収穫するために、常に学び努力する姿勢が、秋田県種苗交換会などでの評価にも表れています。